

話を聞かせると聞いてくれる

ピア・サポートの実践から

——友だちの話聞く

ピア・サポート・ジャパン代表 元小学校教諭

まつだまりこ
松田満理子

スキルの問題なのか

最近、大人の間には、「話を聞いてもらいたい」現象が蔓延しているようだ。大人のストレス解消法として、「人に話す」が女性では断トツ、男性でも上位に入るといふ結果もでてくる。「癒し系」といふ言葉もはやりで、他人の話を上手に聞いてあげられる人が好かれるからであろう、カウンセリング講習会等も盛況らしく、もっと聞き上手になりたい人たちにぎわっているようだ。

「他人の話を聞いてあげたい」と考える人にとって、話を聞くためのスキルを獲得することは、良いこと・役に立つことに違いない。声のトーンやリズムを考えながら

ら話を聞く、相手が話す言葉を反復することで聞いてい
ることを表現する、などを会得することで、「聞き上手」
を目指すことが可能だからである。

しかし、それをそのまま今の子どもに当てはめ、「話を聞ける」子どもにすれば友だちが増えたり悩みが子ども同士で解決できたりする、だから子どもにもスキルを教えよう、と短絡的に考えてよいものだろうか。少なくとも、先の大人の場合には、既に「他の人の話を聞いてあげたい」との思いがある点に十分注意する必要がある。

今の子どもたちの状況

平成十三年四月に文部科学省の「少年の問題行動等に

関する調査研究協力者会議」がまとめた『心と行動のネットワーク』と題された報告書では、今の子どもたちの問題として、「社会的ルールが身に付いておらず、社会性が未発達であるということや、自己表現力・コミュニケーション能力が低く、対人関係がうまく結べない」(同報告書七頁)点をあげている。

そして、その背景として、「都市化や少子化の進展やテレビゲーム、パソコンなどの普及により、大勢で遊ぶ、友人と語り合う、他人と協力し合うといった多様な人間関係の中で、社会性や対人関係能力を身に付ける機会が減っており、学校や地域社会といった本来社会性を育成する場で社会性が育まれにくくなっていることが考えられる」(同報告書七頁)と指摘している。

「話を聞ける・聞けない」ことを「自己表現力・コミュニケーション能力」と表現しているという違いはあるが、子どもたちが「話を聞けない」状況を、単に「聞くためのスキル」の問題と考えてしまうのではなく、広く社会性の発達の問題、対人関係能力全般に関わる問題として捉え、社会性や対人関係能力を育てることができにくくなっている状況を問題視している点に注目したい。

そして、この報告書では、学校における対応として

「学校の教育活動全体を通じて、児童生徒に社会性を身につけさせるようにする必要があり、学級活動・ホームルーム活動や児童会・生徒会活動などを通じて、仲間作りや集団活動を推進し、人間関係を築く力を身に付けさせることや、各教科、特別活動などにおいて、社会体験や奉仕活動、集団活動等を積極的に取り入れることが重要である」(同報告書一三頁)とも指摘している。

対人関係能力を育てるには

「日本のピア・サポート・プログラム」でも、今の子どもたちの社会性の問題は、社会規範やスキルなどの学習・獲得以前の問題であり、他者に対する関心や他者とのつながりを保とうとする意欲に欠け、対人関係を適切に維持し続けられない点にあると考えている。もし、子ども他者に対する関心や意欲の欠如が問題なら、それを育てることが先決で、スキル等の話はその後であろう。

では、それを育てる立場の大人の役割とは何だろうか。もちろん、大人自らがモデルになる(お手本を示す)ことも大切なことではある。だが、対人関係能力、大きく捉えれば社会性は、大人が教え込む・引き出すことで単純に子どもに身につけさせられるものではない点

が、非常に悩ましく難しい。社会性等を学習する・獲得する・定着させるには、あくまでも子ども自らが主体となって体験し、感じとっていくしかない。大人にできることは、子どもが体験を通して自らの力としていけるような場や機会をできる限り提供することくらいなのである。

「自己有用感」が「対人関係能力」の鍵

「日本のピア・サポート・プログラム」では、子どもにそうした社会性が育っていく鍵として、「自己有用感」というものを考えている。そして、「お世話活動(他の人の役に立つ体験)」を通して、「お世話する側の子どもたち」が「自己有用感」を持てるような場や機会を意識的・計画的に与えていくことが、子どもたちの社会性が育つ第一歩と考えている。

この「自己有用感」とは、自分も人の役に立っている、誰も見てないようでもきつと誰かがどこかで見てくれているに違いない、人に喜んでもらってうれしい、またやりたい、などの思いである。

では、「お世話活動(他の人の役に立つ体験)」を通して、「お世話する側の子ども」が「自己有用感」を持てるや期待感を持たせる体験的なトレーニングを設定することは、最低限必要なことだと考えている。

だが、トレーニングだけで身に付くほど、対人関係能力は単純なものではない。先に引用したとおり、「仲間作りや集団活動を推進し、人間関係を築く力を身に付けさせる」ためには、「社会体験や奉仕活動、集団活動を積極的に取り入れることが重要」である。「日本のピア・サポート・プログラム」でも、模範的な「トレーニング」だけで対人関係能力が身に付くなどとは考えていない。

「お世話活動」を通じた「自己有用感」の獲得

そこで、体験的トレーニングに続き、子どもは「お世話活動」を体験する。これは、「お世話する・される」という関係の中で、「お世話をする側の子ども」に「自己有用感」が持てる絶好の場や機会である。それが十分に活かせるかどうかは、育てる側の先生たちに「誰の」「何を」「どのように」「育てる活動なのか」という共通認識ができていくかどうかにかかっている。

多くの小学校では、四月の新入生が入学してくる時期に、六年生が一年生の教室に出かけてお世話をする活動

を行うには、具体的に学校の中でどのように場や機会を設定するのであろうか。

「下地づくり」としての体験的トレーニング

「日本のピア・サポート・プログラム」では、まず「下地づくり」としての「トレーニング」を行う。これは、社会性の基礎と考える内容を盛り込んではいくもの、その一つ一つをスキルとして獲得させるということではなく、あくまでも「下地づくり」と考える。小学校では、これを五年生の三学期に全校の先生が関わりながら実施する。その時期の子どもたちが、「早く六年生になりたい」「やっとならしたちができる順番がきた」などの意欲や期待が持てることを主たる目的として、である。

だから、トレーニング部分の「コマ」として行う「聞き方・伝え方」でも、ゲームやロールプレイングなどで「聞いたり、伝えたり」という体験をするが、大切なことは、スキルを学ぶことよりも「人と関わることは楽しい」と感じることを考えている。

先に指摘したとおり、「多様な人間関係の体験が減った」今の子どもたちである。「お世話活動」の前に意欲が行われている。折り紙を教えたり、楽しくゲームをしたり、校歌を教えるなどの活動である。伝統的に異学年交流や縦割り班活動が行われていて、前年度までの六年生の姿を見習いながら育った新六年生ならば、すぐにも「お世話活動」に取りかかれるであろう。

しかし反対に、十分に心構えのできていない六年生が、「六年生だからやれるはず」と責任を負わされたらどうだろうか。しっかりと準備をしておかなければ、手が一年生といえども難しい場面が予想される。「一年生が話を聞いてくれない」「反抗してくる」など、せっかく「お世話する側」の六年生に「自己有用感」を獲得させようと始めた「お世話活動」に対して、マイナスの印象をもつまま活動を終えかねない。

そのうえ、かつての六年生であれば難なくこなせたお世話活動でも、今の子どもたちにとっては非常に難しい活動になってきているのが現状である。小学校の先生たちの話では、当事者の六年生の反応として、「どうしてそんなことをやるの、面倒くさい、かったるい」「自分たちだけで遊んだほうが楽しいよ」という声も多いという。たまたま大家族で育った子どもがいて小さい子どもの扱いが上手だったり、先生の意向をくみとれる賢い子

どもがいたりすれば、一見うまくいっているように見えるのだが、実態はなかなかそううまくはいかないようだ。

事前の計画・準備と事後の「ふりかえり」

「お世話活動」を通して六年生が「自己有用感」を持つるようにするには、事前の計画・準備、事後の「ふりかえり」が不可欠であり、十分に時間をとる必要がある。

まず、「どんなことをしてあげれば一年生に喜んでもらえるだろうか」「自分たちが一年生の頃、六年生にしてもらったことなかで、どんなことが楽しかったか」などを話し合う。そして、一年生にやってあげたいことの中から、場の設定や時間的な余裕も考慮に入れて、自分たちができることを決める。やることが決まれば、具体的に準備や役割分担の話し合いをする。始まってすぐの活動であれば、まだまだ六年生としてぎこちなさも残るので、活動の前にはリハーサルがあってもよい。予想される問題や困難については、先生たちのアドバイスを参考にしながら、十分に話し合っておく。ただし、「お世話活動」が始まったら六年生が主役であり、先生たち

は周りで見守るのが役割である。

活動が終わった後は、その活動がうまくいったかどうか、うまくいかなかったのはどうしてだろうかなどを、先生もまじえて話し合う。そして、二回目の活動に向かうのである。だから、活動は一回だけの単発のものより、三回から五回くらい繰り返されるものが望ましい。

おわりに

「話をする・話を聞く」ことを含め、人と関わる活動に向かうときに、そうした行為自体に意欲や期待感を持っていること、育っていることがいかに大切なことか。それが「自己有用感」であり、長い目で見た社会性の発達にもつながる。そのためには、長期的な見通しをもって「学校を変える」「教職員が変わる」試みが不可欠で、それなしに子どもだけが「友だちの話が聞ける」ように育つことなどあり得ない。

〔参考文献〕

- (1) 滝充(編著)『ピア・サポートではじめる学校づくり 小学校編』金子書房、二〇〇一
- (2) 滝充(編著)『ピア・サポートではじめる学校づくり 実践導入編』金子書房、二〇〇二